

## はじめに

二十世紀は第一次、第二次世界大戦の勃発と破壊、ひいては西洋文明の行き詰まりすら予感させ、二十一世紀はアジア（中国、日本、韓国等）、インド、アフリカ等の幕開け、東洋文明の復活の時代とか言われながら、世界内外の情勢等を顧るとき、実際には、それほど単純、明確な様相を呈しているわけではない。とりわけ国外について言えば、世界経済、政治問題等が絡み、人類みな一様に平和、至福を強く希望しながら、中近東のある地域では、いまなお不安、混乱、破壊が続き、多くの死傷者すら出し続けているというのが偽らざる現状であろう。とりわけ、我が国内を見れば、政治、経済、教育、家庭、宗教さえも、崩壊寸前というような印象すら与え、一体人間の理性、愛、魂、心はどこへいつてしまったのだろうか、一体道徳観、宗教感はどうなってしまったのだろうか。これらの問題に対して、どのような解決策が考えられるべきなのか。

このような現代にあつて、宗教や倫理に関心を持つ者として、十九世紀の前半、実存に生命を賭けて、天に駆け抜けていったデンマークの実存哲学者、真のキリスト教徒たらんとして生涯真の自己自身を獲得するべく格闘し続けたキェルケゴール（Søren Aabye Kierkegaard, 1813-55）、他方、同世紀の後半、満州事変、第二次世界大戦前まで、明治、大正、昭和三代に涉つて国際人・農政学者・教育者・思想家として、かつ『武士道』の著者として知られ、その「武士道」とキリスト教とのを試み、それを根拠にしてキリストにある愛と実践の生涯を戦い抜いていった新渡戸稲造（1862-1933）、この両者に焦点をあて、いま彼らから何か学ぶべきものがあるのか、またそれには何を為すべきなのかを熟考し、それを探り出すべく考察してみたい。

このような意味で、まず第一に、キェルケゴールと新渡戸稲造の生きた時代背景や生い立ち、生き方に関して考察し、第二に、キェルケゴールの場合、キリスト教の養子となつたといわれる騎士道精神と、新渡戸のいう武士道精神のなかに通底する叙述があれば、それを交差させ、そこから何が導き出されるかを考察したい。

さらに、新渡戸稲造について、私自身に関して言えば、恥ずかしいことながら、彼の存在を五千円札の肖像（ただし2004年11月からは樋口一葉）や、また彼が敬虔なキリスト者にして、『武士道 一日本の魂一』（Bushido, the Soul of Japan, 1899）の著者であることは知りながら、彼の同期生であり、親友である無教会キリスト者内村鑑三（1861-1930）の後ろに隠れがちであり、ともすると彼の存在を忘れがちであつたことを告白せざるを得ない。

## 一 キェルケゴールと 新渡戸稲造の生い立ちと歴史的状況

ここで、キェルケゴールと新渡戸稲造の生い立ちとその歴史的状況について簡単に素描しておきたい。

キェルケゴールは、周知のごとく、1813年5月デンマークの首都コペンハーゲンに、父ミカエルと母アーネの七人の子供のなかの末子として生を享けた。1801年にイギリスによるデンマーク艦隊への砲撃が行われ、1807年コペンハーゲンが攻撃され、数千人の死者を出し、国王フレデリックはナポレオン戦争で彼の側につくが、イギリス主導の連合軍に敗戦降伏し、かつての大国デンマークは多くの植民地と領土を失つて今日のような小国となり、とくにノルウェーの分割と独立はその後のデンマークの国力に決定的な影響をもたらし、絶対王政は崩壊しつつあつた。この敗戦により、デンマークには、農業再開発のもとでの経済的更生と文化国家

としての再生の道しか残されていなかった\*1といわれる。

ところで、彼の父ミカエルは、12歳になるまで西部ユトランドの農家で羊飼いをしていたが、毛織物を扱っていた母方の叔父に引き取られてコペンハーゲンに出てそれを手伝い、

約10年後、24歳で独立して忽ち財をなし、40歳で引退して、余生を裕福な金利生活者として過ごしていた。母アーネもユトランドの農家の出で、お手伝いさんとしてキェルケゴール家に来たのだが、先妻の没後、父ミカエルに犯されるという形で結婚し、5ヵ月後、長子を生んだ。道徳的に厳格なキリスト教徒であった父ミカエルは、自己のこの過失を生涯忘れることができず悩み抜いたが、これがセーレンの一生に大きな影響を残すこととなり、末子セーレンの悲劇的な運命はすでにここに胚胎していた\*2といわれる。

キェルケゴールは1841年6月3日コペンハーゲン大学に、学位論文「イロニーの概念について」を提出、10月学位授与、また1840年レギーネ・オルセンと婚約をした(1837年5月彼女を見そめる)が、翌年8月その婚約を自ら破棄した。その理由は多くの研究者によって様々な角度から研究推論されているが、実際の理由は彼自身以外にはいまだ明らかにされていないように思われる。彼は父ミカエルから聞かされた話にショックを受けて、「大地震」なる体験をし、レギーネとの婚約破棄を契機として、彼の文筆活動を始めたといわれる。

他方、新渡戸稲造(幼名稲之助)は1862年8月3日(新暦9月1日)岩手県盛岡に、南部藩士新渡戸十次郎と母せきの三男(末子)として誕生、上には兄二人姉四人がいた。祖父、父十次郎は開拓事業に尽力した。父の死後明治4年、10歳で、叔父太田時敏の養子となって上京、東京外国語学校(一高の前身)に学んだが、明治10年(1877年)9月、16歳で札幌農学校2期生として内村鑑三、宮部金吾らと共に入学した\*3。

東京在住中から新渡戸はキリスト教に関心を寄せ、15歳の時より、英語聖書を買って求め、既に読んでいた。新渡戸(当時太田)が入学した時には、かのW. S. クラーク博士は既にアメリカに(僅か10ヶ月で)帰国した。その札幌農学校では、翌1878年4月、2期生はクラーク博士が書き残していった「イエスを信じる者の契約」に1期生より署名を求められ、新渡戸は真っ先に署名したといわれる。そして署名した二期生のうち、7名が6月、札幌を訪れたハリス宣教師より洗礼を受けた\*4といわれる。

1881年(明治14年)札幌農学校卒業後、開拓使(札幌)に奉職、1883年9月東京大学へ入学の際、教授からの面接試問に対して、「願わくはわれ太平洋の橋とならん」と答えたことはよく知られた事実である。そして同大学で、英文学、理財学(経済学の旧称)、統計学を学んだが、翌1884年8月、同大学を退学、9月にはアメリカのアラゲイニ大学(フィラデルフィア州ミードヴィル市)に私費留学、10月にはジョンズ・ホプキンス大学へ転学し、経済学、史学を研究した\*5。この間に彼はクエーカー教徒となる。次いでドイツのボン、ベルリン、ハレ大学で学び、1890年ハレ大学より学位を受けた。1887年5月アメリカ人マリー・エルキントン嬢(Mary Patterson Elkinton, 1857-1938)と知り合い、1891年フィラデルフィアで結婚、札幌に帰国した。新渡戸は札幌農学校で始めてキリスト教に接する機会をもった。ただし新渡戸の家は代々曹洞宗で、代々の墓は久昌寺(盛岡)にある\*6といわれる。

また、新渡戸自身は札幌農学校在学中、キリスト教への疑問や迷いがあった、事実、信仰(クエーカー)を告白したのは、1886年12月ボルティモア友会でクエーカー会員となった時である。このクエーカーについては後に触れたい。

\*1 小川圭治、『キェルケゴール』 53頁以下参照 講談社 1979。

\*2 柘田啓三郎編 40 『キェルケゴール』17頁参照 中央公論社 1966

\*3 佐藤全弘、『新渡戸稲造の信仰と理想』18頁以下参照 教文館 1985

\*4 佐藤全弘、『日本のこころと『武士道』』40頁以下参照 教文館 2001 新渡戸稲造、『自警録』334頁以下参照 講談社学術文庫 1982

\*5 佐藤全弘、『新渡戸稲造の信仰と理想』op. cit.40頁以下参照

\*6 新渡戸稲造、『武士道』佐藤全弘訳注 註3. 58頁参照 教文館 2000

## 二 キェルケゴールと新渡戸稲造

キェルケゴールと新渡戸稲造の宗教に関して触れるならば、まずキェルケゴールはヘルンフト兄弟団（ルター派の一派）に属し、新渡戸はクエーカー派であり、両者はプロテスタントの一派のキリスト教徒であることが理解される。次にキリスト教と騎士道や、武士道との関わりについて簡単に触れてみたい。

まず第一に、「騎士道」(chivalry)とは、中世ヨーロッパで、騎士身分の台頭によって起った騎士特有の気風をいう。それはキリスト教の影響を受けながら発達し、忠誠、勇気、敬神、礼節、名誉、寛容、婦人への奉仕などを徳<sup>\*7</sup>とした。さらに、G・ミラー博士（George Miller, 1764-1848、アイルランドの歴史家、哲学者、ダブリン大学教授）によれば、「騎士道」は1559年、フランスのアンリ二世<sup>\*8</sup>が馬上競技大会で重傷を負い、亡くなった年をもって、正式に廃止された」と叙述している。他方、明治4年（1871年）に出た、正式に封建制を廃止する詔勅（廃藩置県）<sup>\*9</sup>が、「武士道」の弔鐘の合図となった。従って「騎士道」も「武士道」も封建制から近代への移行とともに廃止され、現在は形式的には現存していない。

第二に、ヨーロッパでは「騎士道」が封建制から乳離れして、教会の養子になり、それは窮境を乗り越えて活気を取り戻したのに対し、日本では、どの宗教も武士道を養うに足るほど大きくなく、それ故、母制度である封建制が過ぎざってしまうと、「武士道」は孤児として残され、独力で何とかやっていかなければならなかった<sup>\*10</sup>ということである。

第三に、新渡戸には、「旧約の日本」という思想があり、これに依拠してキリスト教に「武士道」をするという思想が存在する。この思想は新渡戸の親友、内村鑑三にも1916年「武士道に接木したキリスト教」という論文が存在し、また新渡戸の学問上の弟子であり、内村の信仰上の弟子である藤井武（1888-1930）も「聖書より見たる日本」<sup>\*11</sup>（『藤井武全集第二巻』という論文と、武士道とキリスト教の結合を「の婚姻」（『藤井武全集第一巻』）という叙事詩で叙述している。これは新渡戸の『武士道—日本の魂—』出版後30年近く経ってから書かれたものであり、新渡戸の『武士道』に触発されて書かれたものと考えられる。

## 三 『武士道—日本の魂— 1900』 (Bushido, the Soul of Japan 1899) について

新渡戸が『武士道—日本の魂—』を著述するきっかけになったのは、1887年彼がヨーロッパ留学中、ベルギーのリエージュ大学教授ド・ラヴレ氏（Emile Louis Victor de Laveleye, 1822-92）より日本の宗教教育について尋ねられ、「ありません」と応じると同時に、間髪入れずに彼から「宗教なしとは！道徳教育はどうして施されるのですか？」と質問され、当時彼はその問いに驚き入り、即答することができなかったことである。

\*7 「騎士道」(chivalry) 『広辞苑』第4版 618頁参照 岩波書店 1993（この後広辞苑参照の場合、頁のみ略記）新渡戸稲造、『武士道』op. cit. 239頁以下参照

\*8 新渡戸稲造、『武士道』op. cit. 註 21. 244頁以下参照 Henri II(1519-59)(フランス；カトリック・メディスと結婚、イギリスからブローニュとカレーを奪還、王女エリザベートをスペイン王、フェリペに嫁がせる祝賀競技で重傷を負い死んだ。騎士道廃止はこの事故が原因となった。

\*9 「廃藩置県」；明治4年(1871年)7月、政府が旧来の藩制を廃して全国に郡県制度をしき、中央政権をはかった施策。同年末には北海道のほか三府七二県が置かれた。これが正式に封建制を廃止する詔勅となり、武士道廃止の弔鐘となった。2035頁参照

\*10 新渡戸稲造、『武士道』op. cit. 240頁参照

\*11 藤井 武「聖書より見たる日本」『藤井武全集第二巻』岩波書店 1973. 藤井 武、「羔の婚姻」；『藤井武全集第一巻』岩波書店 1972

またこの種の問いについては、新渡戸は、日頃妻マリー夫人からも同じような質問を受けていた<sup>\*12</sup>。

新渡戸は、その後この質問に答える暇のないまま時が過ぎ、1898年3月、過労のため7年間勤めた札幌農学校を辞職し、静養のため渡米し、その療養中にこの『武士道—日本の魂—』（1899年（原稿校正製本終了））を執筆し、1900年アメリカで出版された。この『武士道』の内容は主として封建制がまだ力を持っていた、彼の若い時代に両親等から教わり、聴かされたことから成っており、しかも英文で書かれたものである。

一方では、新渡戸は当時、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)<sup>\*13</sup>やヒュー・フレイザ夫人(Hugh Frazer, 1837-94)<sup>\*14</sup>等によって、日本が紹介されていることを既に熟知していた。

さて、新渡戸はかの著書のなかで、「武士道」を「日本の国花である桜と同様、日本の国土に咲く国の華である」と述べている。彼は「武士道」のなかに、旧日本において宗教教育の代りをしてきたものがあることに気づいた。彼はこの書のなかで、道徳体系としての武士道および武士道の源流について述べた後、主として、義、勇気、仁、誠実、名誉、克己について論じ、武士の教育と訓練、切腹、刀、女性の訓育および地位に触れ、最後の第十五章～第十七章で「武士道の影響」、「武士道は今なお生きているか」、「武士道の未来について」<sup>\*15</sup>彼の考えを叙述している。

また別の言葉で要約すれば、「武士道とは仁を旨とし、人を憐れみ、勇気を発揮し、礼を重んじ、誠に徹し、名誉を尊び、己れに克つ道である」<sup>\*16</sup>という。即ち、平安末期既に「もののふの道」、「弓矢とる身の習」などのことばで武士特有の存在と当為が自覚されていた。『』<sup>\*17</sup>鎌倉初期の軍記物語、成立は平家物語以前、和漢混淆文で、源為朝を中心に保元の乱が描かれている。『平家物語』<sup>\*18</sup>等では、文武兼備で情けある武将や、命よりも名を惜しみ、恩義ある主君のために潔く戦う武士の姿が描かれ、以後武士の理想像とされた。鎌倉、室町に続く戦国時代には、戦場で主君と運命を共にして献身の思いを強くする臣下もいれば、去就が自由で武によって独り立つ気概を持った武士もいたという。

さらに江戸時代『』<sup>\*19</sup>には、様々な戦国武士が描かれているが、よき大将とは、武略に優れ、慈悲深く、分別があつて人をリードできる人物だと論じられている。幕藩体制が完成して太平の世になると、為政者の立場から儒教に拠った武士道論が起り、以後これが主流となった。(1622-85)<sup>\*20</sup>は農工商の指導者として、常に自省し威儀を正し、五倫（儒教で、人として守るべき五つの道。即ち、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信。）の道を実現することを武士の職分とした。これに対し『』など、死への覚悟と主君への献身を強調する伝統的な心情論を継ぐものも現われ、武士道論と呼ばれた。幕末、外圧による国の存亡の危機意識のなかで、吉田松陰(1830-59)<sup>\*21</sup>らは、国を憂い、止むにやまれぬ思いで「誠」を標榜し、果敢に行動した。日清戦争後、病を得て療養渡米中、新渡戸稲造は西洋のキリスト教道徳に対し、『武士道—日本の魂—』（英文）を著したのである<sup>\*22</sup>。

ここで「武士道」の中に含まれる「儒教」、「仏教」、「神道」、「道教」、および「武家諸法度」について簡単に

<sup>\*12</sup> 新渡戸稲造、op.cit. 27頁以下参照

<sup>\*13</sup> Lafcadio Hearn, (1850-1904) (日本名小泉八雲、ギリシア生れの文学者、1890来日、小泉節子と結婚、帰化、松江、熊本で教鞭を取った。後に東大英文学講師になる。(新渡戸、op.cit. 28頁参照) 新渡戸稲造、op. cit. 註5. 28頁参照

<sup>\*14</sup> Hugh Frazer, 1837-94; イギリス公使夫人、1889来日、6年間滞在して日本に死去。彼女は文筆家、『日本での外交官の妻』によって日本のことを紹介した。新渡戸稲造、op.cit. 註6. 28頁参照

<sup>\*15</sup> 新渡戸稲造、op. cit. 47頁以下参照。佐藤全弘、『新渡戸稲造の生涯と思想』364頁以下参照 キリスト教図書出版社 1980

<sup>\*16</sup> 武士道論；『岩波哲学・思想事典』1371頁参照 岩波書店 1998

<sup>\*17</sup> 『保元物語』；2333頁参照

<sup>\*18</sup> 『平家物語』；op.cit. 1371頁参照

<sup>\*19</sup> 『甲陽軍艦』；op.cit. 1371頁参照

<sup>\*20</sup> 山鹿素行；,op.cit. 1371頁参照

<sup>\*21</sup> 吉田松陰；op. cit. 1371頁参照

<sup>\*22</sup> 佐藤全弘、op. cit. 365頁以下参照

触れておきたい。

まず第一に、武士道は、「儒教」からは、人倫（人と人との秩序関係。君臣・父子・夫婦など、上下・長幼などの秩序、人として守るべき道。）と政治、道徳についての教えを受けている。第二に、「仏教」からは身を運命に任せる平常心、諦観、沈着、死と親しみ、生を賤しむ精神的態度を教わり、それらを日本民族固有の忠孝をもって統一したものが、武士道だという。この統一は千年余にわたる醸成を経て始めて成ったものであり、日本において起るべくして起ったものではあったが、これは本来統合が不可能なもののものであったこと、その意味で武士道も一種の習合であったといえるだろう。

第三に、「」\*<sup>23</sup>はわが国固有の民族信仰であり、日本民族と切り離せないものであり、アストン (W. G. Aston)\*<sup>24</sup>は「神道は知恩と愛情の宗教である」、と述べている。(本来、神道は自然の理法で、神の働きの意)。「神道は、祖先神への尊崇を中心としている。古来の民族信仰は、外来思想である仏教・儒教の影響を受けつつ成立し理論化されたものである。平安時代には神仏習合・が現われ、中世には伊勢神道・吉田神道などが起り、江戸時代には垂加神道・吉川神道などが流行した。明治以降は神社神道・教派神道とに分れ、前者は第二次大戦後まで政府の大きな保護を受けた」\*<sup>25</sup>。

また新渡戸は、「神道は宗教ではなく、それはただ一「祭儀」にすぎない。そこに道徳的教訓は少なく、神学はない。しかしそれは自然崇拝プラス祖先崇拝として今なお力をもっているが、国教ではない。天皇がその救い主であり、宮という語が神殿であり、宮殿である。事実天皇(4世紀)の時、始めて皇居と伊勢神宮とに別れた\*<sup>26</sup>と記述している。

第四に、「道教」\*<sup>27</sup>は、中国漢民族の伝統宗教であって、黄帝・老子を教祖に仰ぐ。古来のや老荘道家の流れを汲み、これに陰陽五行説\*<sup>28</sup>や神仙思想\*<sup>29</sup>などを加味して、不老長生の術を求め、(まじない)・祈祷などを行う。のにより宗教として形態を整え、のち仏教の教理を取り入れて次第に成長、隋唐・五代の頃、全盛を迎え、中国の民間習俗に長く影響を及ぼし、現在に至っている。

第五に、「武家諸法度」\*<sup>30</sup>については、宗教というよりは、武士が遵守しなければならない倫理規範と考えられる。これは江戸幕府が1615年(元和元年)徳川秀忠(二代将軍)の時、諸大名に下した13ヶ条の制令をいう。その後も代々の将軍が下したという。城池の修築、婚姻、参勤交代などを規定し、諸大名を監察し、秩序の維持を図ることなどを目的としたものとされる。

以上、儒教、仏教、神道、道教等の習合によって「武士道」倫理なるものが形成されていたが、それはあくまでも武士の行動規範であり、これらは明文化されたものではなかった。

## 四 クエーカー (Quaker) の特徴について

ここでは、新渡戸の信仰思想として、クエーカーの特徴を簡潔に述べておきたい。

クエーカーは正式には「キリスト友会」(Religious Society of Friends)といい、十七世紀にイギリスのジョージ・フォックス (George Fox 1624-91) が始めたプロテスタントのキリスト教の一派で、現在世界中で

---

\*<sup>23</sup> 「神道」；1341頁参照

\*<sup>24</sup> 新渡戸稲造、『自警録』.op. cit. 218頁参照

\*<sup>25</sup> 神道；op. cit. ibid.

\*<sup>26</sup> 佐藤全弘、『新渡戸稲造の生涯と思想』op. cit. 347頁参照

\*<sup>27</sup> 「道教」；. 1805頁参照

\*<sup>28</sup> 陰陽五行説；. 203頁参照

\*<sup>29</sup> 「神仙思想」；1336頁参照

\*<sup>30</sup> 「武家諸法度」；2234頁参照

約五十万の信徒がおり、イギリス、アメリカ、ケニアに多く、日本では宣教百十余年で信徒は四百人以下の小さな宗教グループである<sup>\*31</sup>。

ところでクエーカー（震える人）は渾名である。創始者のフォックスは聖書に基き、信徒とキリストの霊との直接性を信じる。キリスト教を形成している外面的な様々な要求、-会堂、礼拝、儀式、文書、神学など-よりも、聖書との生きた接触が大事だと主張する。この教えは、1681年アメリカに拡がり、とくにウィリアム・ペン (William Penn、1644-1718) が1681年アメリカのペンシルヴァニア (Pennsylvania = ペンの森) に植民地を開くに及んで、その地一帯は、旧新大陸での迫害を逃れたクエーカーの中心地になった<sup>\*32</sup>といわれる。

さらにクエーカーは静黙の礼拝を守り、集まった信徒は沈黙の中に神の声が語りかけるのを待ち、霊の感動を求める。クエーカーは「内なる光」(Inner Light) と「神の種子」(Seed) を強調する。即ち、先の「内なる光」、神の光は、宗教、民族、時代を問わず、およそすべての人間の心の中に、「内なる光」としてさしこんでおり、また「神の種子」もすべての人の心に蒔かれている。そこで、その光が輝きを始め、その種子が芽吹きかけとなる「靈感」(Inspiration) によって、閉ざされた心が開かれるのを待望する<sup>\*33</sup>と説明される。

ここでクエーカーの信仰の中心である内なる光は、時、所、民族を問わず、およそすべての人間の心の中に差し込む神の光である。新渡戸はその光を、ソクラテスのいうダイモーン (daimónion) の声に認めた。ソクラテスが何かをしようとする時、そのことが良くない時はいつもダイモーンが禁止したという。ソクラテスは青年を惑わすという理由で訴えられた裁判で、自己の無実を弁明している時には、その禁止の声は聞こえず、彼は生涯の導きであったダイモーンの指針に従って、敢然と死に赴いたという<sup>\*34</sup>。

また釈迦が、瞑想の末得た (Nirvana) も、内なる光の働きであり、禅僧の本来無一物、一切空の無の思想にも、この内なる光が差し込んでいる、と新渡戸は考える。

さらに、「内なる光」の顕れは、人によって異なる。モーセ (Moses)<sup>\*35</sup>には「火」として、ソクラテス (Sokrates)<sup>\*36</sup>、ジャンヌ・ダルク (Jeanne d' Arc、1412-1431)<sup>\*37</sup>には「声」として、パウロ (Paulos)<sup>\*38</sup>、ヤコブ・ベーメ (Jakob Böhme、1575-1624)<sup>\*39</sup>、ジョージ・フォックス (George Fox、1624-91)<sup>\*40</sup>、ムハンマド (Muhammad、ca570-632)、パスカル (Blaise Pascal、1623-62)<sup>\*41</sup>には「光」として現われ、これらの

<sup>\*31</sup> 佐藤全弘、『日本のこころと『武士道』』 op. cit. 34 頁参照

<sup>\*32</sup> 佐藤全弘、op.cit. 38 頁参照

<sup>\*33</sup> 佐藤全弘 op. cit. 38 頁以下参照

<sup>\*34</sup> 佐藤全弘、op. cit. 53 頁参照

<sup>\*35</sup> Moses、イスラエル人の指導者。紀元前 14 世紀頃、エジプトに生れ、苦役の同胞を率いてエジプトを脱出。シナイ山において神と民との契約を行い、律法を民に与え、約束の地へ導いた。2533 頁参照

<sup>\*36</sup> Sokrates、(469?-399); 古代ギリシアのてつじん。アテナイで活動。半生を市民の道徳意識の改革に捧げた。対話 的問答を通じて相手にその無を自覚させ (汝自身を知れ・無知の知)、相携えて真の認識に到達しようと努めた。真の認識とは彼の場合、定義で見定めた徳を実践すること (知行一致)。この努力はアテナイ市民に受け容れられず、告発され処刑された。著書なく、その教説は弟子プラトンらによって叙述された。1507 頁参照

<sup>\*37</sup> Jeanne d' Arc (1412-31); フランスの愛国者。北東シャンパーニュ州の一農村ンレミの女。百年戦争の末期、救国の神託を受けたと深く信じ、1428 年シャルル七世に献策して納められ、軍を率いてイギリス軍を撃破、翌年オルレアンを奪還。のち敵国イギリスと通謀するルーアンの司教らによって、異端の宣告を受け、裁判の上、焚殺された。1203 頁参照

<sup>\*38</sup> Paulos、キリスト教をローマ帝国に普及するのに最も功の多かった伝道者。もと熱心なユダヤ教信者でキリスト教徒の迫害に加わったが、復活したキリストに接したと信じて回心し、生涯を伝道に捧げ、64 年頃ローマで殉教。「異邦人の使徒」と呼ばれた。その書簡は新約聖書の重要な一部である。2039 頁参照

<sup>\*39</sup> Jacob Böhme (1525-1624); ドイツの神秘主義思想家。靴作りを業とした。新教派に属し、神が本質を現すには否定的な悪を必要とすると考え、シェリング、ヘーゲルらに深い影響を与えた。2303 頁参照

<sup>\*40</sup> George Fox (1624-91); イギリス人、クエーカー人の創始者。神の種子と内なる光を重視する。彼は聖書を軽視するということではないが、信徒とキリストの霊との直接性を重視した。イギリス宗教改革時にファミリスト、ピューリタン、セバラティスト、レヴェラーズ、ディッカーズ、シーカーズ、ランターズといった派が生れたが、その中のランターズからクエーカーが派生する。(佐藤全弘、『日本のこころと『武士道』』 op. cit. 37 頁以下参照)

<sup>\*41</sup> Blaise Pascal (1623-62); フランスの哲学者・数学者・物理学者。無限な宇宙に比すれば、人間は葦のように弱いだが、それを

人々は皆はっきりした光に接し、啓示を受けた<sup>\*42</sup>とされる。

これに対して、同じ「内なる光」が働いているとしても、東洋の光は明らかな形をとらず、無定形である。この「内なる光」が最も明確な形をとったのは、イエス・キリストの人格においてであると新渡戸はいう。東洋でも光は光だが、単に結びつける (regare) というだけで、神と人を結びつけるというような意味はなく、つまり、焦点を結んでいない。キリスト教では、キリストにおいて、神が人となられたこと<sup>\*43</sup>、つまり受肉によって、この光は確かな像を結んでいるのである。

さらにクエーカーは、「遡って働く神の恵み」(Retroactive Grace) ということを強調する。即ち、神はこの宇宙全体、全人全地の創造主であり、その神の恵みは全民族に与えられている。その恵みは各国の国民性がすべて尊ばれるとともに、神の恵みと支配は、歴史の始めから終りまで、普く及ぶという国民観、歴史観が生れる。従って、自然のすべてに、動物、植物、鉱物にも神の恵みは注がれ、そこに宿っていることになる。ここから、文化、宗教の多様性と統一という重要な思想が出てくる<sup>\*44</sup>。さらにもう一つ、クエーカーは実行を尊重する。「内なる光」がすべての人の心にさしている以上、万人平等であり、性、人種、身分、貧富の差のすべてと、クエーカーは戦った。すべてを兄弟とみるクエーカーはさまざまな社会改革運動に関わり、生活は質素に、余分のお金は貧者、弱者救済に積極的に使用した<sup>\*45</sup>。

新渡戸は、日本人として、日本の文化伝統のなかに、クエーカーの信仰と相通い合うものを認め、日本の国民性を保ちつつキリストに従って生きる道の接点を、「武士道」とキリスト教に見出したのである。

## 五 「旧約の日本」について

新渡戸が『武士道 ー日本の魂ー』を刊行してから既に 115 年余が経過する。それは旧日本の武士の道徳思想を培ったものとして、その系譜、源流、特質、実態が、簡潔に、一応西洋の騎士道との比較を念頭において、武士道の未来についても叙述されているが、そのなかで特徴的な発想として、「旧約の日本」という思想が見られる。

この「旧約の日本」という思想を、新渡戸は『武士道』の第一版序文で次のように記している。

「…私が殆ど共感を覚えないのは、教会の様々な方式や、キリストの教えをばやかす色々な形式であって、キリストの教えそのものではない。新約聖書の中で、キリストが教え、私たちまで伝えられている宗教を私は信じているし、また、心に記された律法をも信じている。さらに私は、神はすべての民族や国民-異邦人であろうと、つまり、キリスト教徒であろうと異教徒であろうと-「旧約」と呼んで差し支えない契約を結ばれた、と信じている。…」<sup>\*46</sup>。

ここで、新渡戸は日本と「旧約」と関連づけて次のように解釈している。即ち、「「旧約」—a testament which may be called "old"と記し、契約も古いも小文字となっていて、イスラエルの民との旧約(大文字)と異なることを示す。しかし神は各民族と「旧約」(小文字)を結ばれたと信じた」<sup>\*47</sup>。という。それは神がイスラエルの民と結ばれた契約である大文字の旧約(the Old Testament)とは違う、別の旧約である。神はこのような小文字の旧約を、世界のすべての民族と結ばれたというのが新渡戸の解釈である。

---

知っている人間は「考える葦」として偉大であると説いた。人間の自己矛盾を救うものはキリスト教であると説いた。これを物体・精神愛という秩序の三段階と呼んだ。今日では、実存主義の先駆とみなされている。

<sup>\*42</sup> 佐藤全弘、『日本のこころと『武士道』』 op. cit. 54 頁参照

<sup>\*43</sup> 佐藤全弘、op. cit. 54 頁以下頁参照

<sup>\*44</sup> 佐藤全弘、op. cit. 55 頁以下頁参照

<sup>\*45</sup> 佐藤全弘、op. cit. 57 頁参照

<sup>\*46</sup> 新渡戸稲造、『武士道』 op.cit. 第一版序文 註 9 29 頁参照. 佐藤全弘、op. cit. 114 頁参照.

この「旧約の日本」観は、内村鑑三にもあるが、正確には言表化されていない。しかし藤井武の思想は「聖書より見たる日本」、「羔の婚姻」に見られる。藤井武は専ら日本に与えられた旧約をその日本の精神史（神道から解釈）に探ったのであるが、新渡戸の思想はもっと広く大きく、神は世界万民の神である以上、すべての民族にそれ特有の旧約を与えられたのだ<sup>\*47</sup>と解釈する。即ち、中国人には中国民族としての旧約があり（儒教、道教など）、インド人にも特有の旧約が授けられているという解釈である。

この「旧約の日本」という思惟が妥当であるなら、キェルケゴールの母国「デンマーク」にとっても「旧約のデンマーク」というものがあり得るであろう。

しかし、新渡戸（内村、藤井も大体同意見）の「旧約の」という思想は独自のではあるが、一般的にキリスト教界で認められているわけではない。

## 六 「アブラハム・イサク物語」と「」について

デンマークは、ヨーロッパの一つの国、かつて封建時代には騎士道の影響下にあった国であり、新渡戸稲造は、『武士道』の著者であり、日本人としてこの世に生を享け、武士の子として、廃藩置県以後も精神的に武士道の影響下にあったことは自明のことである。とりわけ、日本の武士道の強調点は「忠孝」にある。にも拘らず、新渡戸の『武士道』では、孝についてはごく簡潔に触れられている<sup>\*48</sup>に過ぎず、それを第二例で述べたい。

まず第一例の「忠義」の例として、両者に関連するものとして、キェルケゴールの『おそれとおののき』における「アブラハム・イサク物語」と新渡戸が叙述している「菅原伝授手習鑑」（人形浄瑠璃・歌舞伎の演目、二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作）<sup>\*49</sup>が挙げられる。

さて、創世記 22 章 1～13 節によると、アブラハムは神の命令で独り子イサクをモリヤの山で犠牲として殺し捧げるため、イサクを連れて行った。イサクにはそのことは一言も知らせず、縛っていざイサクを殺す間際に天使が介入、近くの茂みにいた雄羊を犠牲にしてイサクは助かったのである。

その「アブラハム・イサク物語」に類比的な物語として、『武士道』のなかの、「菅原伝授手習鑑」（寺子屋の段）には、旧約神話と人形浄瑠璃・歌舞伎という違いはあるが、通底するものが存するように思われる。これは身代わり死の物語である。

ところで、「菅原伝授手習鑑」の荒筋は次のようなものである。菅原道真（＝菅丞相、845-903）は、平安初期、左大臣藤原時平（871-909）一味の讒言に遭い、都から筑紫へ追放された。彼の政敵一味はそれでは満足せず、道真一家を根絶しようと、その息子捜索の手が、道真の旧臣（の寺子屋に匿われていた）の元に及んだ。源蔵は捨て身で一計を案ずるが、捕縛にやってきたのは事情を知り尽くしていた松王丸（白太夫の三つ子兄弟梅王丸、松王丸、桜丸のうちの一人）であった。絶対絶命と思われたが、土壇場で松王丸も道真を慕っていた事が判明した菅秀才は危機を免れたが、松王丸の子小太郎をその犠牲となった。

まずキェルケゴールの『おそれとおののき』の主題は信仰、神を畏れること、単独者として神の前に立つことの問題である。この問題を彼は、信仰の父アブラハムとその子イサクの物語を創世記第 22 章 1～13 節に託して述べている<sup>\*50</sup>。

次に本書の仮名の著者「沈黙のヨハネス」は、グリム童話「忠臣ヨハネス」に由来する。ここでは、最

<sup>\*47</sup> 佐藤全弘、op. cit. ibid.

<sup>\*48</sup> 佐藤全弘、op. cit. 98 頁参照。

<sup>\*49</sup> 新渡戸稲造、op.cit. 註 14. 133 頁以下参照 因みに、註 14 で佐藤全弘（訳者）が、新渡戸稲造の「菅原伝授手習鑑」の解釈には少し誤りがると指摘している。以上の理由から、フリー百科事典『wikipedia』；「菅原伝授手習鑑」の粗筋を要約して、引用させていただいた。

<sup>\*50</sup> 柘田啓三郎、『キェルケゴール』 『おそれとおののき』 解説 358 頁以下参照 白水社

後に「忠臣のヨハネス」は石になったということ、つまり、キェルケゴールは、「石にされて生命を失っても語らなければならないことがある」という意味でこの仮名を用いたのである<sup>\*51</sup>。

さらに、この著書の表題の『おそれとおのき』は「恐れ慄きつつ自分の救いを達成するように努めなさい」というフィリピ書第2章12節のパウロのことばからも理解されるように、単なる「恐怖と戦慄」ではなく、絶対的、超越的な神に対する人間の畏怖の態度、畏れ謹んで神の前に立つ人間の姿を表している<sup>\*52</sup>。

キェルケゴールの思想を要約する。まず、アブラハムの行為のなかに、有限なもの、即ち、父がわが子イサクを捨てた後で、背理なものの力によって彼を再び獲得する、これが信仰の弁証法であり、この「二重の運動」をなす人が「信仰の騎士」であるのに対し、無限なるもののために一切の有限なるものを諦める人は「無限の諦めの騎士」である。しかしこの諦めのなかにも平和と安息があり、それによって永遠なる意識が得られる。さらに信仰の騎士は、無限の運動を為し終えてから有限の運動をする。その場合有限性を失うのではなく、逆にこれを完全に獲得する。無限性のために有限性を諦めるには人間的な勇気があれば足りるが、より以上のものを得ようとすれば、「逆説的に謙虚な」信仰の勇氣(情熱)が必要である。そして信仰の運動は常に背理なものの力(神)によって行われ、無限の諦めは、信仰に先立つ最後の段階であり、従って、この運動を行わなかった者は、信仰をもつことはできないということである<sup>\*53</sup>。

さらに、「無限の諦めの騎士」は信仰という視点からみれば、この世では祝福されることのない「異邦人」であるが、「信仰の騎士」はこの世においてこそ祝福される「唯一の幸福者であり、有限性の族長である」<sup>\*54</sup>という。具体的には、倫理的には父アブラハムが子イサクを殺すという行為が、宗教的には、父は子イサクを神に捧げることとして是認され、それが普遍的なものによってではなく、背理なものの力によって神聖な行為とされ、イサクは再び授与され、以前にもまして現世において祝福される。その意味でアブラハムの行為は「倫理的なものの目的論的停止」を含んでいるのである。

因みに、現行刑法に照らせば、法的には父アブラハムの行為は実行されれば殺人罪、しかし、実際には神に助けられた故、殺人未遂として処罰されるべき対象である。即ち、宗教的には神聖な行為として改めて子イサクを授与され、祝福されるという逆説、つまり、この倫理的義務以上の新しい範疇を必要とし、これが信仰である。ここでキェルケゴールが、「信仰の騎士」なることばを用いているのは、キリスト教の養子となったとされる騎士道精神の片鱗とみることができるだろう。

次に、先にも触れたように、「菅原伝授見習鑑」(1747年初演、寺子屋の段)のなかで取り扱われた内容は、藤原時平一味の讒言に遭い、都から筑紫へ流された菅原道真へのより大きな怨みにより、さらに彼の息子菅秀才の生命をも狙うという陰謀に、道真の旧臣武部源蔵は彼の寺子屋で匿っていた菅秀才の生命を助けるべく、命がけで一計を案ずるが、捕縛にやってきた松王丸と源蔵は、苦衷の決断の末、松王丸の子小太郎を身代わり死(犠牲)に捧げたのである。

これはキェルケゴールの『おそれとおのき』で扱われた「アブラハム・イサク物語」のアブラハムの不安と苦衷に基づく行為とはかなり異なった解釈ができるだろう。

菅原道真の生きた時代は845年~903年であり、『武士道』の記述より類推すれば、仏教、儒教の影響は既に日本に伝播されていたと考えられる。この時代状況を考慮にいれても、現行刑法に即して言えば、「寺子屋の段」の武部源蔵は殺人教唆に、そして松王丸は殺人幫助に問われるだろう。因みにこの事実を菅原道真は認識していたか、否か、そして彼がどのような罪に問われるのか推測するのは難しい。またこの事件のどの部分

\*51 小川圭治、『キェルケゴール』op. cit. 249頁参照

\*52 小川圭治、op. cit. 250頁参照

\*53 柘田啓三郎、op. cit. 363頁以下参照

\*54 柘田啓三郎、op. cit. 364頁参照

が真実で、どの部分が創作であるのか、なぜ人形浄瑠璃・歌舞伎の演目になったのかも後代の人の推測の域を出ないだろう。

しかし、新渡戸が、『武士道』の中で取り上げた「アブラハム・イサク物語」（旧約神話）と「菅原伝授手習鑑」（寺子屋の段）の比較は、適切な実例であるとは言い得るだろう。第二例、「孝」の例として、頼山陽（(1780-1832)）の『日本外史』のなかで、平重盛（(1138-79)）が鹿ヶ谷事件で後白河法皇の幽閉を企てた父清盛を諫めるため義務と情愛に引き裂かれる思いで、全身全霊で祈っていることばがある、「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず。」<sup>\*55</sup>と。そしてここでは、公人は私人に先立つものという意識が見られ、「忠」のなかに「孝」が見え隠れしている。そしてこれは親が子をではなく、子が父を諫めるという辛く、悲しい事件であるが、忠と孝がいかに両立し難いことかが推測される。また騎士道における「孝」の事例は、キェルケゴールの著作にはその例は見出せないが、それは孝が軽んじられていることを意味するものではない。

さらにソクラテスのダイモーン (daimónion) について、ソクラテスの場合、不思議、霊妙を意味するものであり、とりわけ彼だけに聞こえる声、体験される禁止の声を意味する。先にクエーカーの特徴である「内なる光」の説明の際、ソクラテスやジャンヌ・ダルクには「声」として現れると新渡戸は叙述している。『武士道』でも、ソクラテスは民衆を惑わした理由で、裁判によって、死の判決を受けた。その際、彼にはダイモーンの声が聞こえず、そして彼は誤った判決でも国法は国法として遵守すべきであるとして、自ら毒杯を仰いで死に赴いたという。つまり、彼には自己の良心(名誉)と国への忠義のためという理由であるが、『武士道』のなかにも、武士社会の掟として、忠義と名誉を重視する風習があったとされ、共通するものが看取されるのである。

とくに「ソクラテスのダイモーン」については、キェルケゴールは『『イロニーの概念』の中で、プラトンのソクラテス理解の基本を、空虚を内包するイロニーにおき、見せかけの充実を基礎とするヘーゲルの思弁的哲学批判の出発点としている。そしてプラトンの著作から、イロニーの問題に関係の深い『饗宴』『プロタゴラス』『パイドン』『ソクラテスの弁明』『国家』等を検討していく」<sup>\*56</sup>。その結果として、「プラトンの理解は、クセノポンより一歩ソクラテスの本質に接近していると彼は評価する。しかしプラトンは、何か積極的な理念を設定することによってイロニーの否定性に踏みとどまることはできなかった。そのためにイロニーを全体として追求することに失敗したと考えられる。それに対して彼自身は「ソクラテスの実存はイロニーである」という」<sup>\*57</sup>。「アリストパネスの喜劇『雲』は、寧ろその喜劇性の故に、却ってソクラテスの本質をイロニーとして捉えるのに成功した」<sup>\*58</sup>。「そしてソクラテスのダイモーンについてのヘーゲルの解釈を根拠としながら、その否定性を、さらに無の意識にまで深めることによって、ソクラテスのイロニーについて彼独自の理解を展開しようと試みた」<sup>\*59</sup>のである。とくにキェルケゴールは、第一部において、「ソクラテスの実存はイロニーである」といい、その世界史的意義を明らかにした。第二部の要約は省略させていただくが、つまり、「彼の『イロニーの概念』の中心的テーマは、「無限の絶対的否定性」としてのソクラテスのイロニーの視点に立って、ロマン主義的イロニーを批判することにある。このようなロマン主義批判を通じて切り開かれた主体性の

<sup>\*55</sup> 新渡戸稲造, op. cit. 註 19. 20. 21. 136 頁以下参照 頼山陽, (1780-1832); 名は襄、江戸後期の儒学者、詩人、歴史家、広島藩の儒者の家を出。京で学を講じた。『日本外史』の著者。『武士道』. 註 19 平重盛 (1780-1832); 平安末期の武将。清盛の長子。保元平治の乱に功あり。累進して左近枝大将、内大臣を兼ねた。性謹直・温厚で、武勇に勝れ、忠孝の心が深かったと伝えられる。註 20 平清盛 (1118-81); 平安末期の武将。忠盛の長子。平相国、浄海入道、六波羅殿とも呼ばれる。保元平治の乱後、源氏に代って勢力を得、娘徳子を高倉天皇の皇后とし、その子安徳天皇を位につけ、皇室の外戚として勢力を誇った。註 21

<sup>\*56</sup> 小川圭治, op. cit. 199 頁参照

<sup>\*57</sup> 小川圭治, op. cit. 200. 頁以下参照

<sup>\*58</sup> 小川圭治, op. cit. 201 頁参照

<sup>\*59</sup> 小川圭治, op. cit. 202 頁以下参照

立場は、後のキェルケゴールの事によれば、「実存的主体性」にほかならない。これは彼の実存の立場への突破口が明確に示され、切り開かれたということこそ、彼の後の思想の発展を明示するものであった<sup>\*60</sup>と  
言い得るであろう。

## 終わりに

さて、キェルケゴールと新渡戸稲造の生涯と信仰という視点から、両者の接点を『武士道』のなかにそのヒントを見出し、それを検討すべく、試みてみた。

まず第一に、両者の共通項として、「忠」と「孝」という事例を取り上げてみた。キェルケゴールは、『おそれとおののき』のなかの「アブラハム・イサク物語」において、父アブラハムの行為は、倫理的に言えば、子イサクを殺そうとしたのであり、宗教的に言えば、彼は子イサクを神に捧げようとしたのである。ここでの父アブラハムの不安と苦悩は、彼が殺人者か信仰者かのいずれかを選択せざるを得ないという矛盾葛藤のなかにあって、「背理なもの力によって行動したこと」、即ち超越的な神に彼は単独者として従い、疑い、しかし最後には神の意志を畏れ、受容し、服従したのである。ここで彼自身、信仰が「背理なもの力による逆説的な無限性の連続」であることを掴み取った<sup>\*61</sup>ということ、即ち、キェルケゴールは神を神たらしめ、己の実存を賭けて神と人間との関係を正すために単独者として、信仰者として戦うべく自らにも課し、それを全うしたことを意味する。この思想はキェルケゴールが、生涯を通して、「人はいかにして真のキリスト者になるか」と同時に、「人はいかにして真の人間として生きるか」という実存的自覚と実存的人間論を確立することが彼の最大の関心事であったことを証明するものと言い得るだろう。

他方、先の（寺子屋の段）のなかで、菅丞相が藤原一味の讒言に遭い、都から筑紫へ追放され、その後も彼らは、旧臣武部の寺子屋に匿われていた、彼の息子菅秀才の命を探し求め、皮肉にも捕縛にきた松王丸と源蔵は旧主君への「忠孝」の念のから、苦衷の決断によって、松王丸の子小太郎をその犠牲に捧げた事例はどう解釈し得るだろうか。この事例に関しては、「アブラハム・イサク物語」のように、神への「信仰」からではなく、主君への「忠孝」という武士道精神からなされたかと判断し得るだろう。新渡戸は『武士道』（第九章、136頁）の中で、西洋（騎士道）の個人主義では、父（または母）と子、夫と妻、と別々の利害・義務を認めているが、日本（武士道）では、家族の利害とその成員の利害・義務は丸ごと一つ-つまり一にして不可分だ<sup>\*62</sup>と指摘している。従って、前者は、西洋的（騎士道的）、科学的、分析的として解釈され得るが、後者は、東洋的（武士道的）、非科学的、総合的として解釈され得るだろう。次の息子平重盛の父平清盛へ諫めの事例は「忠孝」という情愛深い日本人独自の例であるが、西洋にも、「忠孝」に関して、「平重盛、平清盛」に類似するような、またこれを超えるような例は存在するのではないだろうか。

さらに、ソクラテスのダイモーンについて一言すれば、キェルケゴールはダイモーンについてヘーゲルの解釈を根拠としつつ、その否定性を無の意識にまで深めたが、ソクラテスのイロニーについて彼独自の理論を展開しようとした、その発展的自発性が認められる。第二に、キェルケゴールの実存哲学の特異性は、当時のヘーゲル主義的思弁哲学や神学を批判し、総じて近代思想が人間の本質を理性に限定し、それを基準に真理を合理的客観性とみなしてきたことに反発し、普遍的な理性に尽されない実存としての人間に注目し、個性的”単独者”の自由な主体性の形成に真の人間性を求めた点にある。そして20世紀になって実存哲学、弁証法神学等に大きな影響を与えた。この実存的思想こそ、ヘーゲル以前の哲学的思惟を超えるものであり、彼にとつ

<sup>\*60</sup> 小川圭治、op.cit. 208 以下頁参照

<sup>\*61</sup> 小川圭治、op. cit. 209 頁参照

<sup>\*62</sup> 新渡戸稲造、『武士道』 op. cit. 136 頁参照

て、「もうひとつの道」であったと言い得るだろう。

他方、新渡戸稲造は、生来、武士の家に生を享け、同時に武士道精神のなかで成長した。札幌農学校では、間接的にせよ、W. S. クラーク博士と1期生の導きにより、キリスト教に触れ、ハリス宣教師により洗礼を受けた。しかしその後もキリスト教の教義に迷い、疑問を抱きながらも、東大中退後アメリカに留学して、敬虔なクエーカー教徒モリス氏の導きにより、改めてキリスト教と出会い、クエーカー教徒となった。彼は国際人、農政学者、教育者、思想家として、生涯自由と平和のため、弱者、貧者の救済、女性教育向上のため、多くの社会活動<sup>\*63</sup>に全力を傾注し、実践的キリスト者として生涯を賭したのである。とりわけ新渡戸は東大入学時の試問に答えた「われ太平洋の橋たらん」という志のもとに、初志貫徹、東西のみならず、人と人との心を結ぶ橋、信仰の視点から、現世の国から永遠の国に架けられた橋たらんと、生涯神の僕たるべく天を目がけて駆け抜けていったのである。

第三に、キェルケゴールは西洋の実存哲学者として、信仰の騎士として、「もうひとつの道」を切り開いた思想家であると同時に、これからも真のキリスト教徒たらんと歩み続ける人々に大きな指針を与え、模範であり続けるだろう。他方、新渡戸は東洋の実践的キリスト者として、東洋の武士たらんと「武士道」にキリスト教（キリストの十字架）を接木するという思想を提案し、つまり、死のみを教える「武士道」に、キリストの福音を接木して永遠の生命と救いを与え、それによって武士道に新しい生命の息吹きを与えることを確信したのである。率直に言えば、キリスト教と武士道との真の接木、融合の華を咲かせるには、これからも多くの人々の勇気、愛、知恵を、そして多くの時間を必要とするだろう。私たちは今尚墮落の一途を突進している日本、世界の現状を黙して見過ごすことはできない。そして新渡戸のいうキリストの福音と武士道との融合を図るべきである。しかし武士道精神といってもそれは現代にそぐわない時代錯誤の倫理規範ではなく、従来の武士道精神を21世紀にふさわしい倫理規範、道徳規範に換骨奪胎し、再構築しなければならないだろう。そしてそれは日本のみならず、世界を結ぶ永遠と自然（環境問題、ひいては思想問題<sup>\*64</sup>=宗教問題）の倫理規範となり、人類にとって模範となるような規範であることを私は願っているのである。

（本稿は2005年5月キェルケゴール協会において研究報告したものを加筆修正し、纏めたものである。）

---

\*63 新渡戸稲造、『自警録』op.cit. 336頁参照

\*64 佐藤全弘、『日本のこころと『武士道』』op. cit. 141頁以下参照